

## 2台揃っての完走で2021年シーズンを締めくくる 2021全日本スーパーフォーミュラ選手権第7戦レポート

開催日程	2021年10月30日(土)/31日(日)	開催場所	鈴鹿サーキット(5.807km)
大会名称	2021年全日本スーパーフォーミュラ選手権 第7戦(30周 / 参加台数:19台)		
天候/気温	10月30日(土): 晴れ / 21℃	31日(日): 雨のち曇り / 21℃	
観客動員数	10月30日(土): 6,000人	31日(日): 10,500人	計16,500人 (主催者発表)



全7戦で争われる全日本スーパーフォーミュラ選手権も、いよいよ最終戦を迎えた。舞台は、第2戦でも戦った鈴鹿サーキット。そこから4戦を経て、チームやマシン、ドライバーがどれだけパフォーマンスを向上させてきたかが表れることになる。18号車の国本はその第2戦と、続く第3戦で決勝レースをリタイアしてしまったものの、第4戦SUGOと第5戦もてぎは予選順位からポジションを上げてフィニッシュ。最後まであきらめない走りチームを鼓舞してきた。7号車は、前回の第6戦もてぎ大会で小林可夢偉が復帰したが、今大会も世界耐久選手権(WEC)と重複しているため、小高一斗が復帰。小高としても、スーパーフォーミュラのデビューシーズンをいい形で締めくくりたいところだ。チーム一丸となって、今シーズン最後のレースウィークに挑んだ。

**【予選】**

天気:晴れ / 気温:21℃ / 路面コンディション:ドライ

#7 小高一斗 Q1B組: 9位 / 1' 38.653  
#18 国本雄資 Q1A組: 5位 / 1' 38.158 Q2A組: 5位 / 1' 37.945

予選日の鈴鹿サーキットは、予報通りの秋晴れの空が広がり、スーパーフォーミュラのファンにとっては絶好の観戦日和に。午前8時50分からのフリー走行は、1時間30分のセッションの中で一度も赤旗が提示されることなく、各車が午後の予選に向けて十分に走行を重ねていった。ここで国本はトップから約0.4秒差の1分38秒139をマークして9番手に、小高がその約0.1秒差で10番手に着ける。どちらもQ2進出圏内と予想される上位14台の中に入る形でフリー走行を終え、さらに細かくタイムを削るため、予選に向けてセッティングを煮詰めていった。

迎えた予選は、国本がまずはA組で出走。9台のうち7台がQ2に進出するサバイバルセッションで、国本はセッション開始直後にユーズドタイヤでコースチェックを行った後、残り時間が5分を示したところでコースへと入った。アウトラップとウォームアップラップで前との間隔を十分に作り、アタックへ。既に3名がアタックを終えタイムを並べる中、国本は1分38秒158で暫定3番手に入る。その後、2台が国本のタイムを上回ったが、結果5番手でQ2進出を決めた。

B組で出走した小高も、国本同様にユーズドタイヤでコースチェック後にタイヤを履き替えてアタック。こちらの組は、A組よりも速いトップタイムが記録され、上位6台が1分37秒台に入る厳しいセッションとなった。小高はコースイン時に前にいた#12 タチアナ・カルデロン選手をウォームアップラップで追い抜き、前方がクリアな状態でアタックを開始。しかし、セクター1からフリー走行での自己ベストタイムに届かず、結果は1分38秒653。コントロールラインを通過した時点では暫定4番手に着けたが、ライバル勢が続々とこのタイムを上回り、最終的に9番手でQ1敗退に。2組を合わせた総合結果は17位となった。

Q2に進出した国本は、Q3に進むための上位4台を目指し、#37 宮田莉朋選手に続いて2番目にコースイン。1分37秒945と、この日の自己ベストタイムをたたき出し、暫定2番手に着けてライバルたちの結果を待つ。#6 牧野任祐選手と#4 サッシャ・フェネストラズ選手が国本のタイムを上回り、4位にドロップ。そして#15 大津弘樹選手が3番手に入り、これで国本は5位へ。4位の#4 フェネストラズ選手とのタイム差は0.149とわずかだったが、Q3進出には届かず、総合結果により決勝レースは10番グリッドからスタートすることとなった。

**【決勝】**

天気:雨のち曇り/ 気温:21°C / 路面コンディション: ウェット〜ドライ

#7 小高一斗: 18位 / #18 国本雄資: 15位

前日は気持ちの良い秋晴れの下で最速決定戦が繰り広げられたが、一夜明けた決勝日は、どんよりとした雲が広がり、フリー走行が始まる前には雨も降り始める。たちまちコースはウェットコンディションとなり、高い水しぶきを上げながら 19 台のマシンが決勝レースに向けた最後の練習を行った。

雨は昼頃には止み、併催レースの走行もあったことで路面状況は徐々に回復。スタート進行の最初に行われるウォームアップ走行の頃には、わずかにウェットパッチは残るもののスリックタイヤで十分走れる状況まで戻っていた。しかし、フォーメーションラップが始まろうかというところで、西コースでぽつぽつと雨粒が確認される。ただ、コース全域を濡らすほどではなく、定刻通りにシグナルがブラックアウト。全車がスリックタイヤを装着して 30 週の決勝レースがスタートした。

スタートに定評のある国本だが、今回はスタートダッシュを決めることができず、11 番手スタートの#3 山下健太選手に並びかけられる展開に。S 字コーナーを並んで入った 2 台はサイドバイサイドの末、#3 山下選手が先行。国本は 11 番手に下がってオープニングラップを終えた。小高はスタートで出遅れ最後尾に下がってしまったものの、まだ接近戦の 1 周目で#12 カルデロン選手をとらえて 18 番手に戻り、さらに翌周は#14 大嶋和也選手をオーバーテイクし予選ポジションまで取り戻した。この頃には雨脚が少し強まり、フラッグタワーでは WET 宣言のボードが提示される。路面コンディションが大きく変わることはなかったが、ここから前半戦は、少しだけ濡れた滑りやすい路面の中で、ドライバーたちがタフな戦いを繰り広げていった。

国本はその滑りやすい路面の中で 11 番手をキープしていたが、周囲が 1 分 42 秒後半から 43 秒台前半のタイムで周回している中、1 分 44 秒台から 43 秒台の後半でしか周回できず、ペースを上げられないことに苦戦していた。4 周目には 12 番手、5 周目には 14 番手と、じりじりと順位を下げて行ってしまう。タイヤ交換が可能となる 10 周を過ぎたところで他車は続々とピットイン。国本の順位は自動的に上がり、さらに前後のマシンがピットに入ったことで、クリアスペースで走行できるようになる。前後にマシンが接近した状態だとダウンフォースが抜け、思うようなペースで走れなくなることが多く、国本はこの隙にペースアップ。1 分 43 秒前半のラップタイムを並べ、17 周目には 1 分 42 秒 909 の暫定自己ベストタイムを記録すると、19 周を終えるところでピットへ向かった。

14 番手でコースへ戻った国本だったが、まだ冷えたタイヤの中で 2 台の先行を許し、20 周目を 16 番手で終える。しかしタイヤに熱が入った 21 周目以降はぐんとペースアップし、先ほど追い越されてしまった#38 坪井翔選手をとらえ 15 番手にポジションアップ。さらに前に行く#37 宮田選手も追い詰めていった。25 周目には決勝中の自己ベストとなる 1 分 41 秒 807 をマーク。28 周を終えた時点では#37 宮田選手に 0.7 秒差まで攻めよったが、残り 2 周でタイヤグリップもなくなったか、急激にペースダウン。それでも 15 番手を守り切ってチェッカーフラッグを受け、15 位完走を果たした。

小高は 2 周目を 17 位で終えた後、上位の 1 台がドライブスルーペナルティを受けたことで 16 位にポジ

ヨンアップ。さらにアンダーカットを狙って11周を終えるところでタイヤ交換作業に向かった。迅速なピット作業でチームは小高を送り出したが、ピットロード出口直前で#37 宮田選手に逆転され、18番手で後半のロングステイントに入った。

ガソリン搭載量が多く、車重が重い状態のステイント前半であまりペースが上がらず、苦しい戦いとなった小高。それでも懸命な走りで前を目指し、16周目にはピットアウト直後の#14 大嶋選手をかわして17番手へと上がった。しかし、フレッシュタイヤで自己ベストタイムを刻みながら迫りくる#14 大嶋選手をしのご切れず、18周目には再び18番手へ。終盤、ややペースも持ち直してきたが、そのままの順位でチェッカーフラッグを受けた。

シーズンの集大成となる最終戦は、小高、国本ともにペースに苦しむレースとなってしまったが、チーム一丸となって最後まで走り切り、無事に完走を果たした。KCMGは開幕戦で国本が8位入賞で3ポイント獲得。小林可夢偉が第6戦で10位に入賞し1ポイントを獲得したことで、チームとしては4ポイントを獲得しチームランキングは10位という結果となった。

## 【ドライバーコメント】

### #7 小高一斗

予選日の走り出しとなるフリー走行では調子も悪くなく、予選に向けてもいい手ごたえをつかんでいましたが、実際の予選ではタイヤのピークをうまく合わせることができず、自分のミスでQ1を突破できずに悔しい結果に終わってしまいました。決勝では、課題にしているスタートがうまくいかず、その後のペースも上がらずで、予選に続き悔しさばかりの結果になってしまいました。今シーズンは小林可夢偉選手の代役として、第6戦を除く6大会で参戦させていただきました。毎戦確実に自分が成長できていることを感じつつ、それをうまく結果に結びつけられなかったことが悔しいですが、国内最高峰のフォーミュラレースであるスーパーフォーミュラという舞台で戦えたことをチームに感謝しています。1年間応援ありがとうございました。

### #18 国本雄資

フリー走行でまずまずの手ごたえを感じながら予選に進みました。クルマもいいパフォーマンスで気持ちよく走ることができましたが、Q2で少トラブルがあったことでQ3に進めなかったのは残念でした。ただQ1、Q2ともに自分としてはいいアタック、ベストを尽くした走りができたと思っています。そんな予選とは対照的に、決勝レースではクルマのグリップに苦しみ、ペースが良くない中でオーバーテイクもなかなかできず、とても残念な内容になってしまいました。今シーズンは、開幕戦でしかポイントを獲得することができず本当に苦しい1年でしたが、その中でチームは最善の仕事をしてくれました。少しでもいい結果を出すため、チームと共に上を目指して頑張れたのは良かったです。だからこそ、みんなでやってきた努力を結果に結びつけることができなかつたことが悔しい1年になりました。応援ありがとうございました。

## 【監督コメント】

### 松田次生監督

予選では国本選手がQ2に進出したものの、ちょっとした不具合で本来のスピードを出せずにQ3進出を逃してしまい、一方の小高選手はニュータイヤのピークを出し切れず17位と残念な結果になってしまいました。マシンのフィーリングは悪くなさそうだったので、決勝に向けては気持ちを切り替えて臨みましたが、決勝では一転してペースが上がらず苦しい展開になりました。国本選手は何とか上位に行けなかとピットインのタイミングを引っ張りクリーンエアーで走る作戦を採りましたが、それでもペースは上がらず、逆にピットインを遅らせたことで順位アップはなりませんでした。他の車両と明らかにペースが違っていたので、原因究明が必要だと感じています。小高選手はスタートの出遅れを挽回しようと頑張ってくれましたが、燃料が重い時のペースが上がらず、ピット作業でも順位を上げることができませんでした。今年1年、監督としてチームを見守っていましたが、自分自身もチームに貢献できたのか、いろいろと反省点を感じています。マシンのポテンシャルやストラテジー、チームがいい雰囲気の中でうまく機能していたのか、様々なことにおいて、自分がどのようにチームをまとめたらよかったのか、しっかりと見つめなおしたいと思います。今シーズン、KCMGチームへのご声援、本当にありがとうございました。

